

浅野誠

若者の生き方シリーズ 2

学ぶ・働く・お金・

文化スポーツ・旅移住

2012年9月下旬

はじめに

7月に公開した、本シリーズ「I 人間関係・大人側の若者への対し方」に続くものだ。

若者がかかわる多様な場・出来事について、HPやブログに書いたもので綴った。ここ3年ぐらいに書いたものがほとんどだが、中には9年前のものも含まれている。

今回は、大学授業や近隣などで出会った体験をもとにした、比較的「気軽な」ものが多い。

目次

※ 項目番号は、シリーズ全体を通したもの。
各項目内では、初出順で並べられている。

3. 学ぶ・働く・お金・文化スポーツ・旅移住

3.1. 学ぶ

- 久しぶりの琉球大学授業 トコロテンコースから逃れきれない学生たち 4
- 中京大学教職演習 5
- 教職科目受講生から見えるストレーター秩序とそこでの葛藤 6
- ワザと地球・地域（沖縄）・人生起こし 8
- 若者たちが学ぶ大学・専門学校の空洞化の進行を憂える 9
- 学生アルバイトを、後輩をサポートする仕事など学内での提案 11
- 自主的に学習研究できる大学生を育てる・・・沖縄大学の挑戦 12
- 異世代異時代間協同としての授業 14
- 今、大学へ行く意味を問う——「人生創造=人生おこし」のなかで—— 15

3.2. 働く

- 新入社員意識調査—安定志向=システム依存志向で大丈夫か 18
- 「えーっ！バイト高校生も有給休暇とれるンだって！」を読む 19

3.3. お金

- 学生たちの「15年後の年収」イメージ 20
- 親の年収や県民所得のことがわからない学生たち 21
- 100万円あったら何しますか？（金城憲辰レポート） 22
- 時代変化に先行しているか 若者の消費意識の変化 24

34. 文化スポーツ

- 恋愛・結婚 異質協同 サークルの間関係 若者の文化 26
- スポーツで「人生おこし」を考えている人 28

35. 旅・移住

- 海外での活躍 33
- 長期滞在から移住へ 若者の移住1 34
- 沖縄移住 若者の移住2 35
- 南城への移住と「沖縄おこし・人生おこし」 若者の移住3 36
- 県外に出たがらない若者 ヤマトウンチュウだけで固まる人 37

3 1. 学ぶ

2004年1月20日

久しぶりの琉球大学授業 トコロテンコースから逃れきれない学生たち

2科目を担当した集中講義だが、二つともうまくいかどうか大変心配することがあった。『生活指導』では、事前予習課題をやっている学生は1割くらい、それどころか、事前配布したプリント集をとりまわっていない学生が半数くらいであり、最初の授業では自習時間を特別にとった。『子ども文化論』のほうでは、3日目と4日目の開始時間に間に合った学生は2割で、大半の学生は重役出勤・社長出勤どころか、相談役出勤であった。そこで、当初予定のグループ作業の時間を3時間から1時間30分と縮小せざるをえなかった。

だが、である。その短くなった時間で一気に作業をやり通したのである。大変な集中力というか、不思議であった。以前であったら、そんな短時間でやるなんてことに、「文句」「異議申し立て」が集中するところであった。また、『生活指導』のほうでは、発言点を中心に評価したのだが、全体の場での発言に大変な躊躇がみられた。その結果、最後に課した「特別課題」レポートに殺到し、大半のものがいい成績を獲得していった。

こうした現象をどうみるのか。おおよその傾向として、受験専門高校からの進学者に共通する特徴のようで、そうでない高校からのものは、これらの授業を結構楽しみつつ、積極的発言・活動を行っていた。受験専門高校出身者は、ルールが与えられると、急スピードで走ることができるが、発言するなど、自分でつくっていくということに慣れていないといえそうだ。

そういえば、私が琉球大学をやめる直前の80年代の終わりから沖縄にも受験専門高校が急増しはじめ、その気配が感じられたが、今やそれが中心的存在になってきたのだ。こうした意味では、トコロテンコースをつくりあげてきた1960年代的なありようが、沖縄では90年代以降強まっているといえそうだ。

2004年8月11日

中京大学教職演習

8月4～7日と夏休みの集中講義で、学生たちと「総合学習の時間」のプランをいくつか作成した。体育学部が多い例年とは異なって、今年は情報科学部の学生が多数を占め、情報科学部の学生らしいものとなった。長時間のワークショップで、問題意識を育んだ後、それをきっかけに、4つの単元授業計画と1時間の授業プラン・模擬授業の実施という流れであった。

授業プランをつくり、模擬授業をおこなうということは、かれらにはほぼ初体験であり、それ自体がある程度緊張感をつくるもので、そのなかで若者たちが大人となっていく過程をみるようであった。

近年、以前のように「突出したタイプ」の学生、多数の学生たちをやや「強引に」引っ張っていくという学生は少ない。それを「平均化」した「おとなしい」学生と表現することも可能だろうが、そうではなく、そこに新たな若者たちの「生き方」が表現されているように思う。昨日の沖縄大学のFD企画で、ある参加者が、学生たちは2～3人の学生としかつきあわず、おとなしく反応が少ないことを嘆いておられたが、それは沖縄の学生に特有というものではなく、全国的に近年の学生たちの共通する現象といえよう。

しかし、そうした否定的なとらえかたにとどまってはまずいだろう。むしろ若者たちの「新たな生き方創造」のスタイルがそこにあり、それをどう発展的に開いていくのかが、これからの教育関係者・大人たちの課題となろう。「おとなしい」様子は、「気遣い」の反映であり、その「豊かな気遣い」を多様な世界へと開いていく営みこそが大切であろう。その意味で、若者たちが発見・創造する機会をおおいにもてる授業をつくっていくことを期待している。

2005年5月24日

教職科目受講生から見えるストレーター秩序とそこでの葛藤

教職授業を沖縄と愛知で担当している。そこで気づいた、若者の生き方・ありようをめぐるいくつかのことを書こう。愛知の受講生から、愛知と沖縄の学生の傾向の違いについての質問もあったので、それへの応えという意味もこめて。

1) 時間管理のすごさ。

メールによるレポート提出という形をはじめて行なった。愛知の学生たちは、〇〇日までとすると、その日の夜12時までにはきちんと提出する。せいぜい1~2名だけ数分遅れる程度である。そしてレポート形式もきちんと守られている。沖縄の学生はもう少しバラつきはあるが、20年前と比べると、はるかに「訓練」が行き届いている。

このことを喜ぶべきかどうか、不思議な感覚さえ覚えた。これまでの学校教育のなかでそこまで訓練されているのだろう。

あえて愛知と沖縄の学生の違いということでは、愛知のほうが「管理」により深く馴らされているためか、逆に「管理」を相対化し、つきあうべきものにとらえているように感じ、沖縄のほうはより「まじめ」に指示されたようにしようとしがちだと感じる。

2) リーダーになりたがらない教師志望の学生。

教師という仕事は、なんらかの形でリーダー性が求められるということは、教職志望の学生なら、あたりまえのことがと思っていた。私の『〈生き方〉を創る教育』のなかで書いた三つをアドヴォケイト、ディスカバー、コーディネートを三つのリーダータイプとして、自分がそのどれに近いかをもとに、グループ編成をする際に、愛知にしても沖縄にしても、自分にはリーダー性はないというかなりの人数の一群がでてきた。とくに愛知では多かった。

近年、人から「抜きでる」ことを避ける傾向がここにあらわれているのだろうか。「流れ」に沿って「まじめ」にすすむのが、教師への道だという理解につながっているように感じられる。あるいは、何か特定の教科の知識を教えるのが教師の仕事だと考えているのだろうか。しかし、愛知での授業の場合、教師の仕事をたくさん例示する活動をした際に、教科授業外の多様な活動をあげるのが、教科授業の数倍になったので、そうした認識はない、と思われる。

これは、近年の若い教師たちにもしばしばでてくる傾向である。「まじめ」で「熱心」なのだが、「例外」的事態への対応に必要な「ゆうづう」をかかすことができない事例が多いようだ。その「まじめさ」がゆえに、行き詰まって教師をやめるとか、時には自殺にいたることさえみられる。

3) 「まじめさ」「熱心さ」

大学における教職課程は、こうした「まじめさ」「熱心さ」によりかかり、それをなお「発展」させようとする傾向が強い。ないしは、「まじめさ」「熱心さ」をもつ学生を選抜し、それについていけない学生を「まじめ」「熱心」でない学生として振り落としていく傾向が強い。

しかし、「まじめさ」「熱心さ」はストレーター秩序そのものであるというか、典型である。そのため、トラブルにあった際に、弱い。

4) 普通科高校という進路選択

進路相談への対応をめぐるの討論の際に、実業科高校は幅が狭く、普通科高校は幅が広いという発言に出会った。そこで、私は、普通科は「英数国理社」という受験科目に絞られて「幅が狭い」のではないかと話すと、考え込んでしまった学生が現れた。普通科のほうが「世間知らず」のまま「抽象的に」学んでいる傾向が強いのではなかろうか。

愛知の授業で、「自分とは異なる生き方」をしている人を探してインタビューするという課題を出したところ、同級生などですでに働いている人たちを対象にしたものが多く、かつそこでしっかりと、かつ自分を大切にしながら働いている人に出会って、改めて自分をふりかえる学生が多かった。

5) 「生きかた」について余り考えたことがない

双方とも、「生き方ワークショップ」をすると、ワークショップ最中は結構盛り上がったとしても、ふりかえりの討論の際、発言がいつもより減る。将来のこと、生き方のことを考える機会がこれまでとても少なく、このようなことを考え、討論する機会があまりないために、なかなか発言にまでいかない、というのが理由のようだ。

ストレーター秩序に適合的な人は、教師になるまではかなり「順調」にいくし、教師になりやすい（教員採用試験に合格しやすい）。しかし、いったん壁にぶつかるときに、「まじめ」「熱心」に対応するだけで突破しようとし、対応に幅がない。そこで悲劇的状況も含めて、「おりる」ことになりがちである。そして「おりて」、異なる方向へと踏み出すことができにくい。そこにはストレーター→消極的タイプのフリーター・ニートという流れさえ広がりつつある。

こうしたストレーター秩序に適合的な教職科目受講生に向き合って、私の授業実践は展開している。

2008年12月30日

ワザと地球・地域(沖縄)・人生起こし

かつて大学は、まずは学問の場であり、その教育は、研究成果の提供の「応用」にすぎなかった。しかし、大学の「大衆化」「ユニバーサル化」という事態、つまり大学が多くの人々のためのものになるにつれて、大学教育のありようは変化してきた。そのなかの一つの特徴として、なんらかの「ワザ」を学生に獲得させることが重要なことになってきた。「資格」という形をとることも多い。たとえば言語系の学部では、現実には外国語を駆使できる「ワザ」のトレーニングにシフトしてきているのが、ごく普通になった。

その意味では、「職業訓練学校」「専門学校」などと「わたりあう」関係になりつつある。また、最近では、「ニート」対策として、なんらかの職業訓練する場にも予算が出されている。また、つい最近、解雇された派遣社員のための職業訓練をするプランも出されている。私は、10代後半から20代にかけての若者が、こうした「ワザ」を獲得することは重要だと思う。

全国的には、1970年代以降、沖縄では1980年代以降、「標準化」されたストレター的生き方は、「ワザ」の獲得を拒否、ないしは遅らしてきた。かつては、企業就職してから、その企業に必要な「ワザ」を企業内で訓練するのがごく一般的であった。しかし、それは幹部社員候補だけに絞られてきたのが近年の特徴である。だから、大多数は、「ワザ」なしでは困ってしまう事態に直面する事態が、近年急激に増えている。その問題が、いろいろな形で噴出しているのが最近だ。

だが、それらの「ワザ」が付け焼き刃になってはいないのか、というのが私の問題提起だ。このところ言い続けている、「地球起こし」「地域(沖縄)起こし」「人生起こし」と結びつかない「ワザ」の習得は、若者たちにこれからの人生・職業にとって、その意味・やりがいを与えないものとなる。

しかし、受け身的な受験学習に象徴されるストレター秩序下では、「ワザ」学習も、そうしたものになりがちである。たとえば、ある「ワザ」を身につけても、それがどのような意味・意義が、自分自身にとってだけでなく、「ワザ」を行使する対象者(お客さん)、地域(沖縄)、地球にとってあるのかを、創造的に考えることを難しくしている。

若い教師とか、医師を含めた若い医療関係者とかのなかには、ストレター秩序のなかでいい成績だったから、関係する「ワザ」を獲得して、就職したが、その教師生活・医療生活が、受験学習的にすすめられ、対象者・地域・地球にとってどのような意味があるのかが不明なケースが結構ある。そうしたことを背景に、「倫理」が問われるような「不祥事」が起きたりする。

以上のことをまとめていうと、「ワザ」獲得は必要なのだが、それが「地球起こし」「地域(沖縄)起こし」「人生起こし」と結びついて行われることが不可欠だ、ということだ。

私が、沖縄リハビリテーション学院言語聴覚学科で、国家試験にむけての厳しい他の授業とは異なっていて、「コミュニケーションと対人援助」という「風変わり」な科目を、ワークショップ風に行っている理由は、そこにある。この科目を体験的に学ぶなかで、受講生がどのような医療従事者になっていくのか、ということに一步でも二歩でも考えを深めていってほしいのである。

2009年4月12日

若者たちが学ぶ大学・専門学校の空洞化の進行を憂える

長年、大学教育に携わってきたこともあり、20歳前後の若者の教育のありようにすごく関心をもつ。いまや、この年齢の若者たちの半数以上が、大学または専門学校に通学している。

そして、ほとんどの場合、保護者が学費を支払っている。しかし、その学費を支払える保護者の数が激減しはじめている。

授業料など大学・専門学校に支払う額は、たいていの場合、年間70～150万円ぐらいだろう。そして、自宅通学でなければ、それにプラス100万円以上が必要となる。それらは、本人のアルバイト、奨学金、保護者の仕送りで賄われる。

いずれにしても、保護者の負担率がかなりの部分を占めるのが通常である。

それらを負担するには、年収一千数百万円以上の場合を除けば、貯金をとりくずすか、借金をするかが必要となる。なかには、畑などの財産を処分する例も見受ける。

そうしたことができないときには、子どもは進学を断念し、貯金など、自分なりに財政見通しをつけることができた時点で、進学することを考えることになる。日本ではそうした例は少ないが、外国ではしばしば見られる例だ。沖縄でもしばらく前までは、「季節」（愛知の自動車工場などの季節工のこと）に行ってきて貯金し、大学に入ってきたと語る学生がいた。

このように、かなりの負担が強いられるなかで、いやおうなしに、大学・専門学校への進学率は低下傾向をみせていくだろう、と私は予測している。そして、大学・専門学校としても、財政負担を軽減するための方策を追求しはじめる例がでてきている。大学独自の奨学金制度設定、授業料軽減措置、減少廃止傾向にあった夜間制の復活などなどである。

そのなかで、大学・専門学校の教育が、20歳の若者の将来に向けての力量を獲得するうえで、どれだけ有効なのか、という問いも広がってきている。その問いにしっかりと答えられるようでないと、その大学・専門学校のサバイバルが難しくなっている。

日本の大学は、もともとエリート養成・研究者養成を前提にし、教員は研究成果を情報提供という形でレクチュアし、学生は自分の判断でそれを受けとめたり受けとめなかったりしてきた。だから、「大学教育」の基本構造は、研究者養成に準ずるものだった。そのため、科目設定も専門知識分野で設定されていた。

しかし、大学進学率が上昇し、「研究者養成」的な構図では対応できなくなってきた1960年代から、「大学教育の空洞化」が進行しはじめてきた。にもかかわらず、大学教育および大学教員の意識と実際は、それほど大きく変わらなかった。そこで、1990年代から文教政策が大きく変化し、それまで放置状況に近かった「大学教育」にかかわっての政策がうちだされるようになってきた。

そして、実際、10年、20年という単位の、とてもゆっくりとしたスピードではあるが、変化しはじめている。

しかし、私が見るところ、まだまだ現実に対応しきれていない。

そのなかで、空洞化状況の表面化がそれほどでもない大学・専門学校もある。それはなんといっても、

実学を教えるところである。たとえば医学などは、実学を教えるわけだから、空洞化していたら、すぐに対応せざるをえない。だから、少しずつにせよ、改善が積み重ねられている。

だが、そうした実学の分野でも、いまだ専門分野別の知識伝達が中心のところが多い。そうしたところでは、学生のためこみ学習を徹底して行っている。資格取得中心の大学・専門学校でよく見られる光景である。そうしたところでは、実学でありながら、実際のワザに即して、それを実地に展開できる指導、という点では弱いところが結構ある。資格を授与する国家試験の多くが、知識の獲得量を調べる文章テストが中心になっているからである。

もう一つ、研究者養成エリート養成的要素をいまだもつ大学ではどうだろうか。実際のところ、2000年ころから、そうした大学でも、学生たちが受け身的であり、創造的学習ができない点についての危機感が強まっている。たとえば一橋大学で、私は大学教員対象に授業改善の講演・ワークショップをしたが、そこでも、学生たちの受け身性を「転換」させる教育の課題が話題になっていた。

この二つ以外の大学が学生数においては過半数以上を占めているのだが、そこでの具体的な改革はそれほど進んでいるわけではない。そしてそうした大学において、「定員割れ」の事態が鋭くあらわれてきている。

そうした大学では、100万円単位のお金を支払ってまで、子どもを行かせる価値があるのか、という問いが発生してきそう。

こうしたことから、つめこみ知識教育・放任型「教育」とは異なる新たな教育のありようの必要性が浮かび上がってきている。それは知識を伝達獲得するだけでなく、当人のそれ以降の人生創造への意欲・関心・ワザを、大学らしい形で獲得させるものでなくてはならない。

その点の緊張感を弱めている一つの理由は、学生を採用する企業などが、学生が大学・専門学校で何を学んだかは余り問わない体質が日本のなかに広く存在していることである。大学・専門学校でそれなりの成績をとってきたことが重要であって、どんなことを学び獲得してきたかを問わない体質である。必要な資質は、企業などに入ってから身につけさせるからというわけである。

しかし、企業のなかでも、そんな「ゆとり」がなくなりつつある。その意味で、若者が、何ができるのか、何をしたいのかを、世の中の動向とからみあわせながら、自分でウリを示せるかどうか問われる。そうした力を大学・専門学校が提供できるかどうか問われはじめてくる。

そうしたことに応えうる大学・専門学校教育へと、たとえゆっくりとしたスピードであろうが、シフトしていくことだろう。

このブログでも、いくつかの提案を行ってきたし、これからもおこなっていかねばならないが、こんなことを視野に入れてのことだ。

2009年4月17日

学生アルバイトを、後輩をサポートする仕事など学内でする提案

ある大学での教育プランの話し合いのときのことだが、こんなおもしろいアイデアが登場した。その話し合いの本題ではないので、きちんとした議論は別の形にならざるをえないのだが、大変興味深いものだ。

学生たちは、学外でいろいろなアルバイトをしているが、居酒屋などが結構多い。そうではなくて、学内でアルバイトの機会を提供するのはどうだろうか、というのだ。すぐに思いつくのは、清掃作業アルバイトなどだ。

それはそれでいいが、後輩学生をサポートすること、たとえば新入生に受講登録をはじめ学生生活スタートに必要なサポート、さらには、大学院生がすることが多いティーチングアシスタントのような仕事を、学生たちにも、かれらができるような形で広げていったらどうか、というのだ。

私もこの発想はなかった。でも、ふりかえてみると、私は個人的な形だが、よくやってきた。コンピュータ入力など事務的部分について、私自身のポケットマネーでよく頼んできた。無論、大学予算からの支出ができるときはそうしてきた。授業のティーチングアシスタントについても、大学院生を活用できないときに、ポケットマネーで、研究生をしている卒業生に依頼したこともあった。

こうしたやり方は、教育効果的にとっても高い。先生とのやりとりとならんで先輩とのやりとりがあると、学生たちはツキアイヤスイということで、かなりの効果をあげる。教師の指導以上の効果をあげることも多い。

こうしたことを、大学としてかなりの量、用意したらどうかというアイデアである。こうした事例はないことではない。新入生サポートで上級生を活用する事例はいろいろな大学で行われているようだ。そうしたことをもっと広げようというのだ。

これは、学生の経済状況への一助となると同時に、教育効果も大きい。それはサポートを受ける下級生だけでなく、サポートする上級生にとっても効果が出る。

そして、大学づくりへの学生参加ということの一環にもなりそうである。

2009年5月10日

自主的に学習研究できる大学生を育てる・・・沖縄大学の挑戦

私が沖縄大学客員教授になって、4年がたつ。これまでは年に1回ほど、何かの企画にかかわるぐらいであったが、今年度は違う。事前打ち合わせを含めると、10回近くも会合にでた。

それは、全国どこの大学も共通してもっていないながら、これまで打開しきれていないことに、本格的に挑む課題だ。

大学生が、大学生としてふさわしい自主的な学習研究をしていけるように、全学生を四年間にわたってサポートしていく体制をつくるという、大規模なプロジェクトを組もうというのだ。

これまで他の記事でも書いてきたように、大学に入学してくる学生たちは、与えられた課題をこなすことはできても、自分自身で問題・課題を見出し、学習のための企画・計画を設定し実行していくということになると、不適應になる状況が「ごく普通」なのだ。与えられた課題をこなすという点でも、不十分だという学生もいる。また、どうして大学に来たかという、「流れ」にのっただけという学生が結構多い。

こうした学生の存在は、すでに1960年代からすでに認知されているわけだが、私はそうした状況を1970年代末に「大学教育の空洞化」と名付けて論じ、その改革のための授業づくりを提案してきた。

重大なことは、「空洞化」しているにもかかわらず、大学教育がそれに対応してこなかったことだ。いまだにレクチュアを中心にして、学生に情報を提供するだけにとどまっている授業は多い。というより、そのほうが多数派なのだ。そして、成績評価を甘くして、「空洞化」が表面にでないようにすることが日常化しているケースがあまりにも多い。

「大学サバイバル」時代、そんな状況に、本格的に取り組まないとまずい、という状況がやっとでてきている。そのきっかけは、個々の大学にしてみれば、「外圧」的である大学政策の動向にある。大学政策も、長年の「空洞化」状況を放置してきたが、やっと「本気」で取り組むように見せてきている。

しかし、この受身性が、小中学校高校でつくられてきたのだが、その改革はどれだけ本気なのかは、いささか気になる。それについては、ブログの別の記事「教育の二つの顔」の連載で多少触れてきたことだ。

今、沖縄大学で検討がすすめられている企画の焦点は、いくつかある。

一つは、これまた近年多くの大学で採用されている、一年生ゼミの充実である。これについては、私の勤め先であった中京大学でも行ない、そのスタートに私もかかわった。また、いくつかの大学で、こうした類のゼミのやり方をワークショップなどで提示してきた。

このゼミの内実をつくりだすことを、個別の熱心な教員任せだけにしておかないで、大学全体として現実的なものにすることが求められている。

もう一つは、学生自身が4年間の学習計画を自ら作成、チェック、修正発展をしていくシステムをつ

くること、である。それを、教員だけでなく先輩学生を含めて学生相互の援助しあい、として進めようというのである。そのなかで、学生の中に、大学での学習研究への前向きな姿勢と具体的な展開についての「うねり」をつくりだそうというのである。

もう一つは、すでに実験的に行った授業が大成功に終わったので、それをより広げて本格的に推進しようというのである。それは、学生たちが企画して運営する授業の展開である。

以上の体制を推進していくうえで、大学教員自身の大胆な教育活動が必要となる。そういう大学教員をサポートする体制をつくらなくてはならない。そのサポート・推進体制の構築である。

こうした大きな取組プランを現在作成中である。それに私が「客員教授」としてかかわっているのだ。

取組プランづくりは、大変率直な議論のなかで進められているから、建設的な雰囲気は充満しており、どういう計画としてまとまるかは、私としても楽しみである。私にできるサポートをしている。

そして、大学全体として計画ができあがり、合意形成がなされた後、実施へとすすむわけであるが、これはまた大規模な活動を必要とすることはまちがいない。私にできることは、していきたいと思っている。

2011年12月19日

異世代異時代間協同としての授業

「時代間世代間の協同」は、大人社会の人間関係や組織においてだけでなく、学校における授業についても言える。授業と言うものは、異世代間異時代間の協同活動という性格を持っているのではなからうか。

教師が必要な情報と方法を生徒に提供しつつ、生徒の知的活動を促進していく。生徒は、教師から提供されたその時代までの知識・方法を活用しつつ、自らの知的活動を展開していくのだ。

その過程で、教師自身も知的活動を展開し、学ぶことが多い。

だが、これまでの時代での授業には、こういうスタイルではなく、教師が提供する情報は絶対的なもので、それを生徒が自分の頭に詰め込むというものが結構多い。

時代変化が激しい今日にあっては、教師が提供する知識・方法がすぐに時代遅れになってしまう事例が結構多い。だから、知識の提供と詰め込みというのではなく、教師のリードのもとに生徒たちが知的活動を展開していくととらえることが求められてきている。

授業がこのようなものに変化してきているわけだが、それは旧来の枠組みが変化してきている、ということでもある。旧来の枠組みは、時代とともに、その変容発展を図ることが求められるのだ。

重要なことは、その変容発展に、当事者自身がどれだけ主体的に関わることができるかである。上意下達式に「変容発展」させられた枠組みのどれについていくか、という選択の問題だけにとどめられたなら、それは民主主義の視点から見ると、大変限定的なものになる。その意味で言うと、旧来の枠組みが、非民主主義的だと言って批判的姿勢を持つ人が、何らかの枠組みを提示して、多くの人にそれへの参加関与を求めるといふありようは、民主主義のレベルからいって、大変不十分であることをとらえておく必要がある。

授業でいうと、当事者である生徒自身の知的活動が中心軸となって回って行くようにしたい。

ところで、こうした時代変化が激しくなってきたのは、日本では一九八〇年代半ば頃からだ。

それまでの時代の枠組みの『不全』状況は、そのころは限定的なものであったが、その後どんどん拡大してきており、今日では、枠組み全体の組み替え・取り替えが必要なものさえ、たくさん出てきている。枠組みとの間で生じた部分的ズレへの対処策を講ずるということだけでは済まなくなっているものが多い。枠組みそのものを、当事者とともに構築し直す作業を展開する必要性が拡大しているのだ。

2012年3月

今、大学へ行く意味を問う——「人生創造=人生おこし」のなかで——

※「高校生活指導」2012年春号に書いた小論の一部を再録しよう。全文は同誌をご覧ください。

1) 大学へ行く意味の揺らぎ・低下

大学がエリート教育機関であり、社会的上昇の手段として有効である時代は、かなり以前のことであった。そういう大学の位置づけは、長い移行期間を経た後、1990年前後のバブル期にあわせるかのように登場した大学バブルの時期に、大変化を遂げた。それは、法系・経済系・文系の学部で顕著にあらわれる。大学の新增設がそうした学部を中心に行われたが、当時は定員割れなどという事態とは縁遠く、定員増が学生増に直結していた。

そうしたなかで、社会的上昇の手段というよりも、維持のために大学進学することになり、競争から落ちこぼれないためのものとして大学進学が受けとめられるようになった。別のいい方をすれば、「皆が行くからには、自分もいかななくてはならない」といったように、いわば「社会的習慣」として大学進学を受けとめる傾向が広がったのだ。

日本の大学教育は、明治期の創設当初より、学生のエリート意識に支えられた『自主的学習姿勢』を前提にしており、教員側の教育方法的工夫はゼロに近いものだった。典型的には大講義室でのレクチュアである。学生が実質的に学んでいるかどうかは、教員のあずかり知らぬこととされる。受講生が50人であろうが300人であろうが、教員にとってはいっこうに差し支えない事項であった。大学の経営的採算からいうと、大講義はうまみの多いものだ。だから、大学バブルは、その一つとしてマスプロ化という形をとったのである。

しかし、それは学生の学習効果という点で言うと、空洞化現象が、それまでよりも格段に進行したということである。そのなかで、学生のエリート意識に支えられた『自主的学習姿勢』を「あて」にすることはできなくなった。その現象は、「エリート」を受け入れるはずの難関校でも見られた。学生の受身的学習姿勢が強まるなかで、難関校にしる、入学容易な大学にしる、『自主的学習』が成立しなくなったのである。受身的姿勢を強めた基盤には、定められた学習ルールをいかに早く効率よく進むかという競争が「慣習化」しきったことがある。そこで自主的学習をしていては、ルールを外れてしまう。

そうした事態の広がりなかで、入学定員が大学入学希望者を上回る大学サバイバル時代が到来する。またちょうどその時期に、非正規雇用の増大をはじめとする雇用システムの大変化が並行する。その結果、ルールにのっているだけでは、就職が保障されなくなってくる。大学にいけば、「落ちこぼれずに済む」などといえない事態が広がったのである。そしてさらに、奨学金の有利子化などもあって、ますます親依存度が高まりながらも、逆に40代の親たちの経済力低下が顕在化しはじめ、入学希望者減少、経済的理由の中退者増加が始まる。

これら一連のことが、若者たちの「人生創造」にとっての大学の意味の揺らぎ・低下をもたらし始めている。にもかかわらず、若者たちのなかでの「人生創造=人生おこし」の追求は、「模索以前」の状況に

さえある。そうしたなかで、キャリア教育が叫ばれるようになる。

2) 「高校大学しか行き場がないのに」

以上のように見てくると、子ども・若者にとって、大学進学が、自らの「人生創造=人生おこし」を積極的に展開する有力な道として位置付けられる要素が減少してきたことに気付かされる。むしろ、大学進学というレールがあるから、周りの流れがそうなっているから、それに乗ってきたという消極的色彩が強いものとなり、「人生創造=人生おこし」とのつながりが薄れてきたとさえいえるかもしれない。

大学進学するかどうかは別にして、「人生創造=人生おこし」さえ、若者の関心を薄めている。流動的要素が高く予測がつきにくい現代状況の中ではやむを得ないかもしれない。こうした事情を象徴するものとしてフリーターという言葉の意味変化がある。それは、1980年代には人生創造的な積極的意味で使われたが、その後「やむをえずフリーターになってしまった」という消極的意味で使われるようになった。

こうした事情は、大学進学とのつながりが深い高校普通科でも類似している。というよりも大学よりはるか以前にそうした状況が広がっていたというべきかもしれない。

こうしたなかで、大学に代わる行き場が少ない、高校普通科に代わる行き場が少ない、という消極的理由での大学進学高校進学が、ごく普通にさえなっている。

近年、「ゼロトレランス」ということで、生徒を事実上追い出す動きが強まっているが、かれらに、他に行き場があるのだろうか。同じことは大学でもありそうだ。しかし、大半の大学、とくに私立大学では、それを実施したら、経営的に大学存続の危機に直結する。そこで、様々な方策を取る。中には姑息な手段というのものもあるが、積極的創造的な大学教育改革へと進む可能性をもつものもある。

3) トランジショナル・コミュニティ

子ども・若者は、学校・家族・近隣集団・職場などの場で、およびそれらの場に形成する彼らなりの小集団（コミュニティ）のなかで、「人生創造=人生おこし」を追求してきたし、これからもそうであろう。なお職場には、正規雇用の場だけでなく、アルバイトなど多様な非正規雇用の場を含めて考えることが、若者の現状のなかでは重要だ。

そうした場・集団のなかで、「人生創造=人生おこし」、現代日本のこの時期に焦点化していうと、「学校→職場」の移行を展開する大勢にあるのだ。

ここで「現代日本の」と限定したのは、実に多様なありようが存在しており、現代日本のありようが一つの特異形態にすぎないからだ。学校→家業、学校→職場→学校→学校、学校→自由模索→職場、学校→職場→職場→職場、学校→軍隊→職場といった多様な形が存在する。現代日本にあっても、すでにその多様さが存在している。その点では、学校→職場という形を余りにも標準化し過ぎ、それにとらわれて創造的追求を否定しがちにさえなっている。だから、この時期の移行を、学校→職場とだけ見ないで、多様な移行が存在していることを見ておく必要がある。

そしてこの移行期にあって、学校・家族・近隣組織・職場ならびに若者がつくる小集団がどうなっているか、に注目する必要がある。

これらについて、トランジショナル（移行の）・コミュニティと呼び、それらをどう保障していくか、ということが、ヨーロッパ諸国で重大なテーマになっていることを聞いた。同じ問題が日本でも存在しているといえよう。萌芽的な形であるが、NPO 法人などが補助金を得て、行き場を見つけにくくしている若者たちのために、そうした場になりそうなものを提供する取り組みや、多様な形でのセルフグループには、そうした色彩を帯びるものが見られる。

日本生活指導学会では、近年そうした課題に取り組んでいる組織から話題提供を受けて論議を行っている。だが、学校や職場では、そうしたものを促進する例もあるにはあるが、ゼロトレランスに典型的に見られるように、若者を追いだして、行き場を失わせる例が目立っている。そしてその際、問題解決を若者の個人責任にしたり、家族に任せたりしてしまい、学校や職場は自分たちの問題として引き受けたくない。

そうではなく、学校や職場、広く社会がそうした若者のトランジショナル・コミュニティづくりを保障促進することが重要な課題となっている。学校にそくしていえば、クラス・ゼミ・部活・サークルなどがそうした場を提供できるようにする実践が期待される。高校教師たちによる生活指導実践にはそうした色彩を持つものが多い。大学でもそうした事例が登場しつつあるが、それは後で述べる。

4) 「地球おこし」と「地域おこし」

(略)

5) 「地域おこし」と「人生おこし」

(略)

6) 大学教育での模索工夫

(略)

7) 私の実践例

(略)

32. 働く

2010年4月21日

新入社員意識調査—安定志向=システム依存志向で大丈夫か

19日の放送で、新入社員意識調査の報道があった。おそらく大企業の新入社員だろう。

報道では、「途中転職ではなく定年まで勤める」「上司との飲み会に付き合う」というのが例年より多く、大半のものがイエスと答えている。就職難の時に入社したこともあって、「安定」志向なのだろう、という専門家のコメントも報道された。

率直なところだろう。それは私なりに解釈すると、会社という大きなシステム、「上司」に象徴される大きな流れに依存する発想である。変化が激しい、激動の時代に対応するか、という発想とは逆だ。企業側は、激動の時代を「乗り切る」のにふさわしい人物を採用したのかと思いきや、企業側もそういう回答をする社員を採用したということだ。「期待」を裏切られたのかもしれないが。

世界的に見ると、激動の時代に対応する人物を求め、それにふさわしい人物養成に向かっている。北欧などがそうであり、PISAテストにはそれが反映している。

となると、日本は、激動の時代に対応するという課題意識が希薄だというべきかもしれない。教育システムの主流は、再び量的蓄積を重視する方向へとシフトしている。安定の時期にふさわしいかもしれないが。かりに安定していくとしても、「ジリ貧」傾向が強まっていくだろう。今の日本の支配的流れはそこにあるのかもしれない。打開策が、クーデター的な措置として登場するのかもしれない。

20年前、それまでの階層上昇のための学力競争が、「落ちこぼれ防止競争」に転化したという指摘があった。今や、それを越して、最初から、経済的理由で「競争の土俵」にのりきれないものが量的に増大している。彼らは、最初から「安定」を求める資格がないかのごときだ。かりに「競争の土俵」にのりきれても、「安定」を確保できる比率はとて狭まっている。

日本の学校教育システムの大勢は、いまだに数十年前のもので、知識の量的蓄積による競争原理が支配的だ。こうしたありようが、「勝利した新入社員」が、勝利した位置で「安定」を確保することにつとめる志向を持つ基盤になってはいないのか。

そこでは、「安定」を得ることが最初から困難な多数にたいする視野がない。と同時に、「安定」したはずの当人たちが、困難に直面した時に、創造的に対処する意欲と力量を育てていない、という問題が存在している。

2012年8月29日

「えーっ！バイト高校生も有給休暇とれるンだって！」を読む

著者は、航薫平。フォーラム・Aから9月1日刊行の本を著者から贈呈された。

とてもわかりやすく痛快な物語だし、実際に役立つ本だ。

有給休暇、最低賃金、名ばかり管理職の問題が扱われている。コミック付きのくだけた小説本に解説付き、といった感じ。

当事者のバイト高校生たちの心情の変化がグイグイと読者に迫ってくる。実話にもとづいているので、非常に生々しく響く。

バイト高校生が対象だろうが、大学生も十分対象になる。高校教師や大学教師も授業の教材にできる。

最低賃金が全国最下位の沖縄では、この本の話よりも、「ひどい」話がいっぱいだろう。

雇用契約書（労働条件通知書、労働条件明示書）の話は、私も昨年生まれて初めて沖縄大学からもらって、「感激」した。いくつも非常勤講師をしてきたが、もらったことがない。大学非常勤講師も、実はいろいろと、問題が多い。数年前、私も、ある私立大学に対して、いくつもの問題提起をしたが、当の大学が、さっぱり問題意識がなく「びっくり」のようだった。法律問題の専門家がたくさんおられるのに、と思った。その間の事情は、このブログスタート以前のホームページで書いたもので、ご存じの方もおられるだろう。

最近、労働契約をめぐる法律を根拠に、改善を求めて「闘う」というスタイルの労働組合が増えてきている。個人加盟の地域型がほとんどだが。私の知人も、その委員長をしていて、いろいろな話を聞かせてもらったことがある。最低賃金以下の給料というように、企業が法律違反をしているときに、法律を根拠に闘うのは、大変有効とのことだ。労働組合にも、新しい形が、いろいろ出てきている。

そんな事例も、本書に垣間見える。

ともかく面白く、役立つ本だ。

33. お金

2010年7月19日

学生たちの「15年後の年収」イメージ

先日の沖縄大学教職論の授業で、かつての私の授業での定番だった、「15年後の私の年収」をめぐっての「肩たたき討論」をした。予想年収額に応じて自分の位置を決め討論するものだ。

この討論を通して、社会と自己の将来設計についての多くに認識を得るとともに、これをきっかけに自分自身と社会の将来像を考えていくことが目的だ。

また、この活動は、参加している学生の特徴をよくあらわすので、コーディネートしている私にとっても興味深い。

10年以上前には、自分の親と同世代である「25年後」で討論したが、これだけ先の将来のことを考えることが、空想的になりすぎる傾向が年々増大してきたので、今回の「15年後」のように、より見通しやすいものになっている。

また、収入額は、12年前の愛知県在中京大学で行ったころの半分ぐらいにしてある。愛知と沖縄の違い、また時代の違いを反映して学生がイメージする額が小さくなっているからである。

では、今回の討論で出てきた特徴を抜き出してみよう。

1) 400万円以上は、会社社長になるという学生は別にして、とても少なく、それ以下、特に200万円以下が多い。

2) 子ども学科学生で、将来教職に就きたいという学生たちが多いのに、15年後の30代半ばに正規採用の教員になっているイメージで語る学生は皆無に近かった。非正規教職員が多い現実をよく知っているというべきか。他に、子育て支援センターとか、児童館的な施設で働いているという学生がいた。

3) 教員以外にしても正規雇用で働いているイメージの学生は、それほどはいなかった。身近な社会的現実から考えると、こうなるのだろうか。

4) 子どもを持っているどころか、結婚しているというイメージで語る学生は、大変少なかった。

5) 年収200万円というのは、とても「いい仕事」だというイメージがある。現在のアルバイト給与のイメージから考えるからだろう。

6) 会社社長、子育て支援など、起業にかかわるものが多いのは沖縄の特徴でもある。開業率閉業率一位らしい。

7) 私が「影の声」という形で、正規採用教員の給与など、いろいろな事例を紹介すると、「知らなかった」ということが大半を占めていた。15年後ではなく現在の事例についても、知っている社会的現実がとても少ない。

たとえば授業料など4年間で大学に支払う額は、私立大学だと400万円を超すのが普通で、沖縄大学は破格の低額であることを知っている学生は少ない。生活費などを含めると4年間で1千万円かかるのが普通になっている事実を話すと、ため息が出される。

2010年12月25日

親の年収や県民所得のことがわからない学生たち

大学授業などで、年収を素材にした「人生おこし」のワークショップを、この10年間何回となくやってきた。対象の学生の大半は、18~22歳であるが、あまりにも知らないのが、毎回驚いている。愛知の時も、沖縄の時もそうだ。

たとえば、県民所得というのは、用語も聞いたことがない学生が多い。用語説明した後、推理させると、見当はずれの答えが返ってくる。

保護者の年収は、それ以上に見当がつかない。300~500万という答えが出たりすると、その額では、あなたは大学在学が難しいだろう、と私がいうと驚く。年収300万円では、自分の子どもを大学に通学させることが困難どころか、結婚して子どもをつくる見通しが立たず、結婚をあきらめる人がかなりいると話すと一層驚く。

大学生を持つ親の年収は、全国的に言うと1000万円だという話をすると、これまた驚く。沖縄の自宅生の場合、かなり事情が異なるにしても、だ。

学生のイメージのおおもとは、ほとんどがアルバイトの時給からの計算だ。おおそよ650円の時給で、年間2000時間余り働いて、130万円余りという計算なのだ。時給800円で高いとって、大変喜んでいる学生に出会ったこともある。

こんな具合だから、「15年後の自分の年収は、いくらだと推理しますか」という問いかけをすると、空想の世界だ。看護師とか教員とかいう「堅い職業」を希望する学生でもそうなのだ。

数は少ないが、10年以上働いた後に入学してくる社会人学生ならようやくわかる。社会人学生でも20代前半だと、まだあやふやであることもある。

自らの「人生おこし」と深くかかわる社会状況について、あまりにも知らなさ過ぎることをどう考えたらいいのだろうか。保護者もこのことでは、きちんと教えていないどころか、世帯の収入額を秘密にしている傾向さえうかがわれる。学校でも教えていないに等しい。「社会的無知」を育てているとさえいえるかもしれない。

社会的現実とは断ち切られたところで、教育が行われているのではないか。

今、10代の若者に、厳しい現実が迫っている。大学進学率がダントツに低い沖縄県では、県民所得もダントツに低い。こうしたなか、経済的理由で、大学進学理由を断念する例、入学したが、経済的理由で退学する例が激増する気配だ。

そうしたことに立ち向かうことが求められる今、社会的事実を自分自身の生活現実をもとに認識する教育は、少なくとも必要条件だろう。

2012年2月12日

100万円あったら何しますか？ (金城憲辰レポート)

沖縄大学問題発見演習Ⅱでのレポートだ。なかなか面白い。興味津々というべきか。沖縄の各世代の様子がありありとわかる。

レポーターは、金城憲辰さん。各世代男女、総計50名にインタビューした結果だ。

「100万円あったら何しますか？」

タイトルの通り現金100万円が自分の手元にあり、使い道は自由だとします。その状況で「自分だったら〇〇する！」「〇〇買いたい！」を少し現実的に考えてもらい、「私の100万円の使い道」を2つあげてもらおうアンケートを行いました。

それをまとめて性別・年代別のランキングにしました。

アンケート対象者

10代(高校生以上)～50代の男女 各10人(男5人 女5人)

#10代の場合

	男	女
①	遊びに使う(4人)	買い物(5人)
②	買い物(4人)	貯金(3人)
③	車・バイクを買う(3人)	遊びに使う(3人)

その他・・・旅行するエステなど自分磨き 自練に通う

考察・・・手元のお金を派手に使いたい意見が目立つが、貯金という意見は驚いた。

買い物の内容も服や装飾品などが占めていて、自分本位。

#20代の場合

	男	女
①	遊びに行く(5人)	買い物(5人)
②	買い物(4人)	自分磨き(4人)
③	ローンにあてる(3人)	旅行する(4人)

その他・・・一人暮らしする 貯金 習い事を始める

考察・・・10代とは違い、自分の趣味や興味などに費やす傾向が強い。

遊びの内容は飲みに行くや、買い物はブランドやカー用品などが多数。

また、少なからず将来を意識した意見も目立った。

30代の場合

	男	女
①	買い物(5人)	買い物(5人)
②	旅行する(4人)	貯金(4人)
③	貯金(3人)	習い事(3人)

その他・・・養育費 ローンにあてる 交際費

考察・・・社会的な考えが多く感じた。買い物の内容が「〇〇に～を買う」など
親や交際相手に費やし、自分以外の人にお金を使う傾向。

交際費など結婚や職場での飲み代にあてる意見も目立った。

40代の場合

	男	女
①	ローンにあてる(4人)	買い物(5人)
②	貯金(4人)	旅行する(4人)
③	外食する(3人)	ローンにあてる(2人)

その他・・・養育費 車を買う ジムなどに通う

考察・・・お金の使い道の意識が家族単位。また100万円を使いきろうとしない意見も多く感じた。

30代との違いは子供の将来や定年後の意識ではないかと思う。

50代の場合

	男	女
①	旅行する(4人)	買い物(5人)
②	貯金(4人)	旅行する(4人)
③	趣味に使う(3人)	貯金(3人)

その他・・・習い事 家具・電化製品を買う 自分磨き

考察・・・恐らくだが子供にかかる負担が軽くなったため、自分に使う傾向がある。

しかし家族単位の意識は変わってはいなかった。

自分の時間を大切にするような意見が多かった。

まとめ

女性の買い物がパーフェクトに1位だったことには驚いた。しかし買い物の内容は年代によって違う。また若者のお金の使い道は計画性がなく、年をとるにつれて好きな事への浪費が制限されて計画的になっていた。「寄付する」という意見がないのは、沖縄が震災の影響が薄いからではないかと思った。反省点はアンケートの問題があまりに広すぎたので選択肢を設ければよかったと思いました。

御協力ありがとうございました。

2012年2月27日

時代変化に先行しているか 若者の消費意識の変化

宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」(放送大学教育振興会 2011年)の「7. 若者期の光景」(宮本みち子執筆)では、若者の消費意識の注目すべき変化をデータで次のように示している。

「日本経済新聞産業地域研究所が首都圏在住の20~30代を対象に実施した『2007年若者調査』によれば、20代で自分の乗用車を持っている比率は13.0%で、2000年の同じ調査より10ポイント低下した。しかも、「乗用車を持っていないのでぜひほしい」の比率は、2000年の48.2%から2007年の25.3%へと半減している。車離れは若者だけの現象ではないが、特に20代の若者に顕著に見られる現象となっている。

自分の車を持たない理由は、持つとお金がかかる(42.0%)、「自分には価格が高すぎる」(34.6%)、「日常生活に必要ながない」(32.1%)が上位を占めている。このような現実的事情と並ぶもう1つの理由は、車への興味が低下していることである。すべての年代の中で乗用車への興味が最も低下したのが20代で、5年間で2割も低下している。車は、乗る人のステータスや経済力、ライフスタイルを象徴する記号としての役割が大きかったが、若者の中では、車に関してこのような意味合いが衰退しつつある(日本経済新聞産業地域研究所『20代若者の消費異変』2008年) P139

時代変化を反映するデータだが、若者が先行して示している点に特に注目したい。上の世代が時代変化への対応に躊躇しているかに見えるのと対照的だろう。

さらに、次のデータも注目される。

「経済成長の著しい中国の若者と日本の若者(19~28歳)の消費意識の変化を調査した博報堂の生活者調査『Global HABIT』(2008年)の結果も、その傾向を強く示している。生活の重点を何に置くかに関して、中国の若者は「心の豊かさやゆとりのある生活をする事」(59.5%)、「物質的な面で生活を豊かにすること」(40.5%)であるのに対して、日本の若者は、「心の豊かさやゆとりのある生活をする事」が83.7%と多数を占めている。

また、消費意識について聞いたところ、中国の若者は「どこの国のブランドかを意識する」「外国のものが好きだ」「ブランドで人の社会的地位がわかる」という回答が3割から5割と多く、同時に「いろいろな商品の情報に詳しい」「新製品はすぐに試してみる」と回答する人も多く、消費に対して積極的である。一方、日本の若者は「買う前に値段をよく比較する」が7割を占め、「多くの人が同じものを持つと興味がなくなってしまう」も4割に近い。

仕事に対する意識も対照的である。「仕事と家庭のどちらを重視するか」という問いに対して、中国の若者は「仕事よりも家庭生活を第一に考える」と「仕事を第一に考える」がほぼ半々であったのに対し、日本の若者は「仕事よりも家庭生活を第一に考える」が8割近くに達している。

高度経済成長期に突入した中国と、高度経済成長期を過去に経験した日本では、ライフスタイルに大

きな乖離が生じているのである。成熟社会としての日本の新しい価値観やライフスタイルが若者層に生まれていると見ることはできるだろう。」 P139~140

これらの引用に先立つ文で、「豊かな消費社会で育った若者世代が、雇用不安と所得の停滞する時代の中で、消費意識には大きな変化が生じている」と著者は述べるが、上の引用では、「成熟社会としての日本の新しい価値観やライフスタイルが若者層に生まれている」と述べる。

では、「成熟社会としての日本」は、どのような「成熟」をするのだろうか。依然として根強い経済成長志向はどうなるのだろうか。経済成長に代わるもの、たとえば「定常」状態が登場するのか、あるいは「過剰」を抑え込むために「縮小」が登場するのだろうか。

その点では、若者がどのような『成熟社会』を求めていくのか注目されることだ。

このように、データが示すものをどう読むかは、大変重要なことだ。引用したデータにしても、一時的な現象を示すものなのか、それとも、時代の趨勢を示すものか、著者は、後者に力点がかかった表現をしているように思われる。私も、後者に力点をかける。もしかすると、著者以上に強い力点をかけるかもしれない。

こうしたことを考える際、ここでなされているような国際比較は、有用なアプローチの一つだろう。たとえば、「高度経済成長期に突入した中国」は、「高度経済成長期を過去に経験した日本」を追いかけるようにして進み、日本の過去・現在の姿が、ヒントになるのだろうか。

こうした今後の社会のありようを考える際、欧米、日本、中国・アジアを見ることは、重要なヒントを与えよう。と同時に、重要なのは、「どうしたいか」という問題である。とくに、ライフスタイルの問題は、そのレベルの問題であることをおさえて考える必要があるだろう。

34. 文化スポーツ

2012年7月17日

恋愛・結婚 異質協同 サークルの人間関係 若者の文化

小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 文化』（日本図書センター2012年）の「第8章 現代日本の若者の恋愛とその機能」（羽渕一代執筆）に、次のような一節がある。

「現代日本の若者の恋愛交際が、人間関係スキルや異質性への寛容、仕事・労働と連関しており、社会性を示す行為であることを確認してきた。そして、家族形成の成否も恋愛交際を経験できるかどうかと強く連関している。」 P207

私も共感する、この結論的叙述に至る詳論の紹介は、長くなるので割愛する。

このなかで、「人間関係スキルや異質性への寛容」ということにかかわって少し書こう。社会とか共同体とかいわれるものの一単位として家族が存在していた、かつてのありようから、二〇世紀半ば以降に大転換が進んできた。それは、まだ進行中ともいえそうだが、社会的変化は、客観的にはその一区切りを迎えるところまで来ているが、かつてのありように代わるものを、人々、とくに若者が獲得しきれているかということ、そうでもない例がまだまだ大量に存在している。それは関係の希薄さ、孤立に象徴される。

それは、旧来の共同体に代わって、個人を単位として、個人が自らの意思で、恋愛・結婚を含む関係を構築するありようへと、すでに移行しているのに、関係を築く経験を生み出すものが、いまだ弱いからである。

「家族形成の成否も恋愛交際を経験できるかどうか強く連関している」と指摘されるが、移行の時期には、恋愛・結婚へとつながる諸形態、お見合い・仲人・合コンなどが用意されてきたが、その時期までの「人間関係スキルや異質性への寛容」を育む、機会・教育・サポートがどれほど豊かに用意されているか、という点から見ると、かなり希薄な状態のまま、「年頃」を迎え、対処の仕方がわからないまま、経過していく事態が大変多いのである。

この問題を考えるうえで、同書「第10章 踊る若者たち」（芳賀学執筆）の、「よさこい系祭り」の大学生チーム OZ について、「体育会のようでもあり、体育会のようでもなく」という小見出しの節に書かれている、次の一文は興味深い。

「彼／彼女らが、OZをサークルだとする理由のひとつ目は、このチームの活動がメンバー個々の自発性に基づいていることにある。基本的に、執行部や各種スタッフを務めるコアメンバーから、練習や祭りへの参加は、熱心に呼びかけられはするものの、実際にメンバーが参加するかしらないかは最終的には本人の自発的な意思次第であるという。それゆえ、祭りや遠征への参加計数は、その時々に応じてさ

まぎまである。

第二に、こうした強制のなさは、執行部や各種のスタッフを務めるメンバーの地位にも大きな影響を与えている。共同体的な体育会とは異なり、OZにおいて、学年の違いや、コアメンバーか一般メンバーかの違いは、チーム内での大きな権威としては作用しない。それどころか、サークルであるOZにおいては、メンバーがその活動を通して目指すものは個々自由に認められている。それゆえ、執行部や各種のスタッフは、他のメンバーたちに権威的に自分たちの決定を押し付ける権利を持たないままで、足並みの揃わない多様なメンバーたちを束ねるという厄介な役割を遂行していかなくてはならないのである。」 P350~1

先の話に戻るが、かつての型に代わって、個人が自らの意思で選択・創造するものとしての人間関係が中心になるわけだが、それらを促進するものが必要となる。その一つとして、結社がある。中学・高校における部活がそうしたものとして構築されてはいるが、実際には、かつての共同体的なものの流れを引きずりがちだ。先輩—後輩の上下関係等がその例だろう。また、生徒たちが自発的に結成解散を繰り返しながら、より優れた組織を生み出すよりも、学校が用意したなかから選択するとか、必修制にするとかなどは、日本特有のスタイルだ。それは、結社よりも共同体に近いものだろう。

そうした中で、紹介した「よさこい」チームが、結社的な性格をより濃く帯びている点で注目されている。高校大学になると、近年では、部活系よりも、こうしたサークル系が広がり始めているが、近年の特質は、両者のいずれにも属さない「帰宅部」系の増加が目立つ。

こうしたことについては、私は「<生き方>を創る教育」(2004年大月書店)でいろいろと論じた。あるいは、大学の教職科目で、こうした『結社』をつくるワークショップ型授業を展開しているが、若者の体験・意識は、結社系にいくよりも孤立系の方に傾きやすいものを感じることもさえない。

それにしても、この「よさこい」系のようなありかたの芽生えに一層注目しながら、新たな展開の展望を築きたいものだ。沖縄でも、若者の「エイサー」動向が注目されよう。

こうした体験が弱いまま、カップル関係を作り、結婚・家族形成に至る時、旧来のありようのままの夫婦関係になりがちになる。そのため、異質なものをもちつ男女が結ばれて、協同によって関係を築き、必要に応じて変化させつつ展開するという認識・実践が未熟なままになる。

そこでトラブルが起こると、旧来の上下関係・支配関係を押し通そうとしてDVが発生したりする。また夫婦は同質であり一体であるという信仰が、実のところ夫婦間の権力的関係を生みがちになる。そのなかで、トラブル解決に向かわないで、互いに疎遠になり、夫婦相互が孤立に陥り、関係の消滅へと向かったりしやすくもなる。

個人を単位とし、異質な相互の承認と、異質協同を前提とする現代家族に、旧来の関係をもちこめば、破綻が生じやすい。異質承認異質協同の体験・文化の蓄積の薄さの露呈とも言えよう。

スポーツで「人生おこし」を考えている人

※ 4回連載。各節の番号後に初出日を記入した。

1. (2011年11月18日)

中学高校生には、スポーツに一番やりがい・充実を感じ、将来もその道で歩みたい考えるものがかなりいる。すでに小学生のときから、そう考えるものも多い。また、大学生にも見かける。

同じように、音楽・美術などの芸術芸能分野でも、そうした人が多いのが、沖縄の特徴といえるかもしれない。10代では、受験学習よりも、スポーツ・芸術に打ち込むものの方が多いかもしれない。

このように、多くの若者が「人生おこし」をスポーツ・芸術を中心にして考えていることについて、私なりの考えを書いていこう。

私自身は、スポーツ愛好家ではあるが、スポーツにかかわって「人生おこし」を考えたことはない。

しかし、1990年から2000年代前半まで中京大学で教えていた時に、3000人近くのそうした学生たちと出会い、つきあってきた経験があるので、スポーツと人生おこしにかかわって得た情報量は多い。そんな経験に基づく情報をもとにしながら、書いていこう。

中京大学には、各学年600名を超す学生がいる体育学部があるが、それ以外の学部にもスポーツ中心の学生は多かった。そのスポーツを「人生おこし」で実現するうえで、一番イメージしやすい進路は体育科教員になることであった。他学部では、他教科の教員で、部活指導をしたいという学生がかなりいた。

ということで、体育学部学生に加えてスポーツにかかわりの深い学生たちの大多数が、教員免許を取得するために教職科目を受講する。私の担当科目のほとんどが教職科目だったので、10年余りで3000人近くになるのだ。

体育学部でいうと、8割以上の学生が教職科目を履修し始める。しかし、スポーツでの忙しさや教職科目受講の厳しさで、教育実習まで行くのはそのうち6~7割になる。それでも卒業時点で、学生の半数以上が教員免許を取る。そのうち、「現役」で、正規の教員職につくのは、2-3%だった。何年も採用試験を受け続け、卒業後10年間ぐらいの幅で見ると、最終的に教員職に就くのは10%に近づいていく。それでも、全国シェアでいうと、中京大学卒業の学校教員数はトップクラスだろう。

スポーツでの職業ということでは、プロ選手、ないしは企業チームに所属し、プロに近いスポーツ生活を送るものがある。しかし、その数は体育学部卒業生の1%もいるだろうか。

他には、スポーツ施設での指導員があるが、非正規雇用が多く、長期にわたって生計を維持するだけの仕事にはなりにくいのが現実だ。また、わずかな数だが、トレーナーの仕事、あるいは卒業後専門学校に行って、マッサージ師などになる道もある。それ以上に少ない数だが、大学院を経て、大学教員などの研究職に就く例もないわけではない。

以上の数を合計する、スポーツ関連を職業とする人は、1割に到達するかどうか、と言うところだろう。他の大部分は、企業などへの就職をめざすことになる。20年ぐらい前までは、体力や体育会系ということを買われて、企業就職に有利だ、という話もあったが、そういう話は稀になってきた。

スポーツ・体育系学部には属していないで、スポーツ関連の「人生おこし」を追求する他大学・学部の学生は、さらに厳しい状況にあるようだ。

こうして考えると、スポーツで「人生おこし」を考える若者の多さと対照的に、スポーツ関連就職は「狭き門」というか、超超「狭き門」なのである。そして、徐々にこのギャップに気づき、他の道を探すようになる、というのが、ごく普通の道である。

2. (2011年11月23日)

前回、スポーツで「人生おこし」を考える子ども・若者は大変多いが、スポーツにかかわりのある職業に就く、就ける人は大変少ないということを書いた。

そこで、いくつか考えるべきことが登場する。
おおまかにいって、次の四つについて考えたい。

- 1) 「人生おこし」を考える際に、スポーツ以外に、やりがいがあって、子ども・若者がアクセスしやすいものがなぜ少ないのか。
- 2) 職業としてのスポーツ「人生おこし」を断念した時に、どうすればいいのか。
- 3) 職業としてスポーツに専念できないとしても、スポーツに取り組んできたことが、「人生おこし」に役立つのは、どういう場合か。
- 4) どうしても「スポーツ」にかかわって「人生おこし」をしたい時には、どうしたらよいか。

まず1)からだ。スポーツが、子ども・若者の大半が取り組むほど人気になったのは1960年代以降だ。大半の子ども・若者が中学校・高校に通い、その学校の部活動が盛んになり、また、テレビをはじめとするマスメディアが、スポーツ人気を高めたことがその背景にある。

それ以前は、家業を継ぐことを中心に、10代後半になれば、生活の糧をえるために働く必要があった。そこに「人生おこし」の中心があり、家業をいかに継いで行くか、あるいは、どこでどんな仕事を得るのか、つまり「就職」というテーマが、「人生おこし」の中心であった。それと結びつきつつ、結婚・子育てといった課題も並行してきた。

そうしたなかで、多少の時間はスポーツに取り組んだが、それは余暇・気晴らし・レクリエーション・趣味であった。「人生おこし」と関わるなどは想像さえできない人がほとんどだ。

だから、職業生活を中心に、やりがいがあり、自分の希望・適性にあった「人生おこし」をいかにするか、ということが、子ども・若者の現実生活と結びついて存在していた。

親も、家業・家事についての力量を子どもたちに仕込んできた。その点で、親の教育力が発揮されて

いた。家業を継ぐわけではない子ども・若者も、なんらかのワザ（職業的力量）を身につけて、その「腕」をもって、働く人（職人）として自立していった。

だが、1960年代の経済・社会の激変のなか、それらも激変した。家業をつぐとか、職人的ワザで仕事を得るのではなく、学歴にも頼りながら会社に就職する形に変わった。そこでは当人のもつ職人的ワザというより、会社の方針に従って、様々な仕事を渡り歩くことが重視される。自分なりの腕を見せるといっても、会社の方針に柔軟に対応できることが重視され、そうしたことができれば、終身雇用が保障される。自分の腕にたいするこだわりが強ければ、かえって妨げになるほどだった。

そんななかで、高校では、職業との結びつきが強い実業高校ではなく、結びつきがとても薄い普通高校の方が、「格が上」という現象が広がっていく。

そして、こんなやりがいのある仕事をするために、こんな力を身につけるのだ、という将来像をもった「人生おこし」ではなく、私の言うストレター型、「できるだけいい点数→できるだけいい学校→できるだけいい会社」というコースを歩むかどうかに、「人生おこし」が委ねられる。

学校の学習も、やりがいのあるものを発見創造し「人生おこし」につなげていく、という形ではなく、できるだけ高い点数をとるかどうかが「人生おこし」につながると言うことになったしまった。それは学校の教育力の低下ということにもなる。そういう学校に教育を外注することで、家族の教育力も、外注に注ぐ『金次第』の話になり、家族自身が行う教育力は限りなく低下していく。

そんななか、やりがいを見出せるし、自分自身の成長が分かる場として、スポーツが登場するのだ。スポーツ以外では、芸術芸能がそうだ。ごく少数だが、学問研究の道もあるにはある。

つまり、仕事・職業と結んで「人生おこし」の影が薄くなり、それまでは「余暇・気晴らし・レク・趣味」的な位置にあったスポーツなどが「人生おこし」に浮上してきたのだ。

3. (2011年11月29日)

前回、「人生おこし」を考える際に、スポーツ以外に、やりがいがあって、子ども・若者がアクセスしやすいものがなぜ少ないのか、について書いた。その最後に、仕事・職業と結んだ「人生おこし」の影が薄くなり、それまでは「余暇・気晴らし・レク・趣味」的な位置にあったスポーツなどが「人生おこし」に浮上してきたのだ、と書いた。

こうした状況は続くのだろうか。終身雇用制が崩れ、非正規採用が増加し、さらに産業構造の激変とともに、即戦力を求めたり、柔軟性や創造性が高いものを求めたりする動向のなかで、若者の職業にかかわる人生おこしのありようが激変している。

私流に言うと、ストレター型、つまりレールのうえに乗っていれば、なんとかなるというありようが縮んできている。レールが崩れていけば、能動的創造的に生きる方向が拡大する。それは、若者がやりがいを感じてきたスポーツの世界にも言える。

たとえば、多彩なニュースポーツ・生涯スポーツの広がりなど、スポーツジャンルの増加はそれを反映しているだろう。あるいは、スポーツと同じくらい、ないしはそれ以上に多様な芸術芸能関係の広がりがそれを反映しているだろう。たとえば、長期的にみると、野球が人気を集めている状況に変化が起きている。また、かつては、体育会系と文化会系という二分がかなりはっきり成立していたが、いま、その境界は薄れてきている。スポーツが得意で音楽も得意だというものも結構多い。スポーツにしても1種目ではなくて、複数種目するものも多い。学習面でもスポーツ面でも活躍するものも多い。

親も、レールのものを、子どものお膳立てすれば、なんとかなるとは言い切れなくなっている。

こうして、模索・試行錯誤の様相が、人生おこしのいろいろな場面で広がっている。となると、受身的に一つのことだけに集中すると言う形では何ともならなくなりつつある。

職業にしろ、スポーツにしろ、多彩な活動にいかにか創造的に取り組み、人生おこしに連なる蓄積をつくっていくか、が重要になる。

その際に、人間関係のありようが重要になってくる。とはいえ、かなり前、体育会系は、タテ型組織構造で実力を発揮しやすいということで、就職率がよかった時代があったが、いまではそうとは言えなくなっている。スポーツ自体でも、タテ型指導訓練型が、かつてのようには成り立ちゆかなくなりつつある。

仕事と余暇・趣味を二分するのではなく、両者を重ね合わせたありようが早期から模索されている。ロボコンへの熱中などは、その一例だろう。アルバイトが、経験者からみれば過酷な待遇であったとしても、初体験者にしてみれば、新鮮さ充実感を与えることが多いのも示唆的だ。

子ども・若者たちが、そうした模索・試行錯誤の中で、「人生おこし」に入っていけるありようを、早目に作り出していく必要があるだろう。10代終わり、あるいは20代にはいって始めて考えるとすれば、その時に模索・試行錯誤が始まるわけで、それが完了するのは、早くも20代終わり、たいていは30代になってしまう現実があるし、その傾向はさらに拡大しそうな流れがある。

そうではなく、遅くとも10代半ばから考えていきたいことだ。その際、家業・家事従事、アルバイト、職場体験などにしろ、スポーツ・芸術体験にしろ、学業体験にしろ、多彩なものに積極的に取り組む体験の蓄積が、その後の長い人生おこしに寄与するところは大きい。

そうした豊かさを、自ら積極的に築く場の重要な一つとして、スポーツが位置づくようにありたい。

4. (2011年12月5日)

スポーツ話題が長くなってしまった。スポーツ話題の1回目で予告して、まだ書いていない次のことをひとまとめにして、簡潔に書こう。

2) 職業としてのスポーツ「人生おこし」を断念した時に、どうすればいいのか。

3) 職業としてスポーツに専念できないとしても、スポーツに取り組んできたことが、「人生おこし」に役立つのは、どういう場合か。

4) どうしても「スポーツ」にかかわって「人生おこし」をしたい時には、どうしたらよいか。

スポーツは、子どもにしろ大人にしろ、熱中させる強力な魔力のようなものを持っている。それだけ魅力があるわけだが、それは、うまくいかない時、止めざるをえない時に、大きなショックを与えがちだ。

病気怪我の時、レギュラーになれなかった時、敗退した時、部活動停止解散になった時、スポーツ系の進路に進めなかった時、そうした経験の一つも持たない人は稀だ。

そうした時、多種目に取り組んでいたり、別の種目について調べていたりすれば、別のものに比重を移動することができる。オール・オア・ナッシングで一つのことだけに打ち込んでいる状態は避けたい。多種目というのを、スポーツだけに限定することはない。文化系活動、学業、仕事、といろいろある。スポーツでも、海外のように、複数種目に取り組む形を取りたい。

上手くいかなかった体験を、プラス思考で生かす逞しさを持ちたい。大学新生で、レギュラーになれるはずという思い込みが見事に崩され、それを転機にニュースポーツで世界レベルになったものに出会うこともある。怪我体験をもとに、トレーナーの道をめざすものはたくさんいる。あるいは、医療関係の道を開拓するものも多い。

決断がしっかりしているものほど、その後の展開がすごくなる。

こうしたことをうまくする人は、人間関係が豊かであることが普通だ。やっている種目での人間関係以外には少ないと言う人は苦勞する。

多様な世代・経験を持つ人と多様なつながりを持つことは、仮に一つのスポーツを続ける人にとっても不可欠だ。部活によく見られる『上下関係』と言うのは、そうした人間関係を阻むことさえある。人間関係の狭ささえ作りだしかねない、一つの種目の部活に圧倒的エネルギーを集中する日本の部活システムの弱点を、よく承知しておくことが大切だ。

多様な人間関係を基盤に、励まし合い、相談し合い、アドバイスをもらい、新たな人間関係を広げる方向を追求したい。

35. 旅移住

2003年9月19日

海外での活躍

先日、青年海外協力隊でパプアニューギニアで活躍して、戻ってきたばかりの卒業生が友人とともに来宅した。私のまわりには海外に行く青年たちが多し。多様な生き方を創造していくために、いろいろな情報に触れることを私が応援していることもあるのか。今、別の卒業生はブータンに行っている。そうした海外にでかけた青年たちは、多くのことを発見し、自分の人生をさらに創造につくっていつている。

難しいことといえば、帰ってきた後、その人の創造性を発揮することができる定職を見つけることだ。訪問した彼も、今、そのことで模索創造中である。私は「ベストでなくても、ベターで行ってはどうか」というと、その彼は、行く前に私がそのように発言したことにとても示唆を受けたという。物忘れが悪くなって、そんな発言をしたことは忘れていたが、今、青年たちのなかには、安定した収入を確保できる点では困難はあるが、創造的な人生を追求しようとする、かなりの数の一群がいる。そういえば、1999年に一年間滞在したトロントにはそうした若者が大量にいた。そうした彼らを応援していきたいものだ。それに、今、私自身もそうした歩みにもう入ってしまっている。

2009年12月4日

長期滞在から移住へ 若者の移住1

若者の沖縄移住のスタートについて書いてみよう。

先日の千葉大学の学生の玉城案内、そして我が家での語り合いでもそうだが、このあたりを訪問する若者たちのなかには、この地域への特別な関心を持つ人たちが多く、多くの若者たちの沖縄訪問が、まずは海洋・海浜レジャーを中心に、それにいくつかの観光スポットを加えるものであるのとは、かなり異なる。

スピリチュアリティへの関心までもってくる人は少ないにしても、若者としての生き方模索・創造の流れの中での訪問という色彩が含まれていることも多い。

そんな沖縄訪問体験が、いつか何か人生上のきっかけで、沖縄を思い出し、しばし沖縄に滞在してみようか、ということで、沖縄滞在を開始することもあるだろう。以前の沖縄訪問の際に知り合いになった人をつてにすることも多いが、まずは、知人宅、ゲストハウス、ウィークリーマンションあたりに滞在し、しばしの沖縄生活「実験」を始める。多少の貯金をもって来る。

そのうちアルバイトを始める。あるいは、最初からアルバイトの仕事を確保しておいてから、スタートすることも多いだろう。

そして、興味がますますわき、しばしやっていけそうだ、と判断すると、アパートを借りて、本格的沖縄生活スタートとなる。

その際、一人よりも、知人・友人同士、あるいは愛し合うカップル同士など、二人だと心強い。実際、二人以上で一緒にこられる例は多い。

そして、たんにアルバイト的な仕事だけではなく、関心を持つ何かを共同で始める、あるいは、何かの修行を始めることになるケースもある。あるいは、沖縄に来る前にやっていたことの技を生かせる仕事を見つけたり、SOHO (Small Office Home Office) で始めたりする。

こうして、半年ぐらいたつと、なにかしら見通しができ、本格的「移住」になる人と、そうならず、沖縄から離れる人に分かれる。沖縄を離れても関係を継続する人もいる。

「移住」になる例の一つに、沖縄でカップルを作ることがある。その際、片方が、ウチナーンチュだと、「移住以上」でさえある。一挙に増える「親戚縁故」関係の多さに驚くことさえある。

この過程で、もともと持っていた都市型生活スタイル、金銭・商品過剰依存型生活からどの程度距離を置けるようになったかどうかが、南城市など「田舎」で暮らせるかどうかの一つのポイントになる。それが難しければ、那覇などに住むことになるだろう。

その際、人間関係ネットワークをどれだけ築いているかどうか大きい。そのネットワークは、「移住者」だけでなく、地元の人とどれだけ築けているかどうか、もう一つのポイントになる。そうしたネットワークが築けると、月10万円以下の生活が可能になってくる。

以上の話は、移住開始から1～3年までのことだ。そこから先は、次のステージになる。

2010年2月14日

沖縄移住 若者の移住2

このごろ、南城かいわいに住む若者たちで、沖縄生まれでない人とよく出会う。30代以上だと、それまで住んでいた他府県から「移住」してきた、という感じなのだが、20代だと「移住」というほどのものでもない。

大学を卒業して仕事先・仕事場として、沖縄を選んだという感覚の人も多い。親の一人がウチナーンチュなので、沖縄に住み、仕事を始めたという若者もいる。

大学に入るために沖縄に来たが、卒業後もそのまま沖縄で働くことにした若者も多い。20数年前、琉球大学の教育学部には、そうした学生がそれなりにいたが、他の大学・学部では少なかったように記憶している。しかし、今やそれは珍しいことではなくなったようだ。

たとえば、県立芸術大学、とくに美術系を卒業した若者が、わたしの近辺には目立つ。美術系ということであると、県立芸術大学だけでなく、いろいろな美術大学卒業者で、このあたりで仕事をしている人にしばしば出会う。

そういう若者たちには、かれら相互のネットワークを築いていることが多い。石垣あたりに行くと、そういう人ばかりが固まりすぎと感ずることもあるが、このあたりではそうではない。彼らだけで内向きではなく、もともとの地元の人とのつながりをつくる人も多い。その場合、同世代だけでなく、異世代とつながることも多い。また、ウチナーンチュと結婚する人も多い。

こうした、多様な人々のつながりが広まり深まり、新たな協同創造が進んでいくことを期待したい。

そうした人たちの出身は、東京・大阪などの大都市が多いが、北海道も多い。最近では、私が住んでいた愛知・岐阜といった人も結構いて、驚いたりもする。

2010年3月18日

南城への移住と「沖縄おこし・人生おこし」 若者の移住3

他府県から沖縄に移住してきた若者には、当然のことながらいくつかのタイプがある。転勤・入学、あるいは海洋スポーツが好きで、というタイプもあるが、南城あたりには少ない。最初は那覇あたりに住んだが、つながりができて、南城に来た人が多いと思う。沖縄移住の前からつながりがあり、何度も南城に足を運んだ経歴をもつ人もいるが、そう多くはない。

こうした方々には、異なったタイプでありながら、多くに共通してみられる傾向として、他府県、特に大都市での生き方・生活のありように疑問を抱いた、「ついていけなくなった」というきっかけをもつということがある。大都市の、追われるような忙しさ、人間関係の希薄さ、金銭中心の生活といったものへの疑問などだ。

対照的なありようを沖縄に見つけて、沖縄移住したという人は、かなり多いと思う。そうした人には、計画的積極的に沖縄移住したというより、「まずは」「ともかくは」移住に至ったという人も多そうだ。

そうした人には、「癒し」を求めての人も多いが、意外に、離島や田舎に暮らすより、まずは那覇などに住む例が多い。大都市への拒否反応がありながらも、都市的生活になじんでいるので、「一挙に」田舎に行くことを想定していないのだろう。コンビニやATMがないところは住めないという人もいよう。多少は働かなくてはならない、ということで、仕事がある那覇などでは、ともかく暮らせる、というわけだ。アパートなども見つけやすい。南城では、そうした点では、足がかりを得にくいのだ。それはそれでいいと思う。

開始した沖縄生活のなかで、どういう出会い方、暮らし方をするかのほうが大切だ、と思う。夢のような沖縄認識が壊される人もいれば、それまで知らなかった沖縄を発見する人もいよう。沖縄のプラスマイナス双方を発見することが現実的だろう。その中で、なお沖縄に住み続けるのかどうかを判断することになる。それは当人一人の判断というだけでなく、作り上げる人間関係にもかかわる。

そのなかで、大げさにいえば、沖縄の課題も、自分自身の課題も引き受ける覚悟になった人、やわらかく言うと、沖縄の中にいる自分を自然に感じ、「楽しみつつ」、あるいは「開き直って」沖縄に生きよう、生きるしかない、生きてしまう、ということにあいなった人たちが、5年、10年、さらに20年以上も生きてしまうのだろう。そういう中で、南城の自然、人間とのつながりが生まれて、南城に移り、長く住む人がでてくる。

そうした人の中には、積極的に「沖縄おこし・人生おこし」をする人が生まれる。そうした人がとても増えてきたな、と感じるこの頃だ。「田舎」の南城市にもそうした人が珍しくなくなり始めている。

2010年8月21日

県外に出たがらない若者 ヤマトンチュウだけで固まる人

沖縄の若者が、沖縄から出たがらない、と嘆く話を時々聞く。経済的に他府県の大学に行く条件がないわけではないのに、他府県の大学を進路選択から外すとか、県外に行く条件があるのに、県内就職にこだわる、などである。

むろん、ずっと沖縄から離れて、沖縄にもどってくるな、と言っているわけではないのに、頭から県外は駄目、という姿勢であることに問題を感じておられるのである。

私もこの意見はなるほど、と思う。県外に出て初めて、沖縄の良さ、しかもどういう点が良いのかを知ることができるし、それだけに沖縄の弱点、そしてその弱点のカバーについても、ヒントをえられる可能性も高くなる。

さらに、他府県に限らず、できれば海外にもでかけたい。そうした際に、最初は『団体』や紹介で出かけても良いだろうが、二回目以降は、自分で作ったつながりと計画で出かけたい。

同じことは、沖縄に移ってきたヤマトンチュウについてもいえる。せっかく沖縄に住み始めたのに、ヤマトンチュウだけで固まっているという話もよく聞く。そして、他府県の都市文化をそのまま持ち込んで暮らす人もいる。

そうではなく、自分の持つ文化と沖縄の文化をチャンプルーにした生活を創造してほしい、と思う。

同様に、「田舎」雰囲気のある南城市近くに住む人にも、那覇のような都市的生活の流れで住む人もいる。人々のつながりも、都市時代のものを引き継ぎ、近隣とのつながりに消極的な人が結構いる。

私は「郷に入りては郷に従え」は好きではないが、「郷」との関係なしに住むのも好きではない。

以上をまとめて言うと、多様な世界で生活し、その地域の人々と交流し、さらに共同創造していくことを大切にしたい。そうした多様な世界を知り、共同創造した経験を豊かに持つ人が、「沖縄おこし」「地域おこし」、さらに「地球おこし」で重要な役目を果たし、また「人生おこし」でも豊かな展開をする人であらう。